

## 接触場面初対面会話の話題転換における

## 話題の終了表現及び開始表現

## —新出型の話題転換に焦点を絞って—

嶋原耕一（立教大学）

Topic Closing Expressions and Topic Opening Expressions  
in Conversations of First Encounters in Contact Situation:  
Focused on Shifts to Unrelated Topics

Koichi SHIMAHARA (Rikkyo University)

キーワード：初対面会話，話題転換，終了表現，開始表現，接触場面

Keywords： First Encounters, Topic Shifts, Topic Closing Expressions,  
Topic Opening Expressions, Contact Situation

## SUMMARY

The aim of this paper is to reveal how Japanese learners learn expressions concerning topic shifts. For the aim, this research controlled learners from the perspective of the experience of interacting with native speakers. As a result of discourse analysis, collaborative shifts were observed more in native speakers, unilateral shifts were observed more in learners with much experience and unexpected shifts were observed more in learners with a little experience.

## 1. はじめに

雑談会話では、様々な話題が参加者によって導入される。そして新しい話題の導入は、先行話題から後続話題への話題転換を意味する。先行研究では、円滑な話題転換の重要性とともに、それが日本語母語話者（以下、母語話者）と日本語学習者（以下、学習者）の会話（以下、接触場面）における摩擦の原因にもなりうるということが、指摘されてきた。例えば田中（2015）は、母語話者の立場から、学習者と話す際に「話題の転換が唐突に感じられたり、こちらがまだ話し終わっていないのに別の話題に切り替わったりする等、話の進め方に違和感を覚えること」があること、そしてそのような違和感が、「ひどい場合には「話を聞いていない」「重視されていない」等相手への不信につながってしまう可能性さえ」と述べている（p. 131）。そのため学習者は、相手に唐突な印象を与えずに、円滑に話題を転換できるようになることが望ましい。

先行研究では、円滑な話題転換に資する要因として、先行話題の終了表現と後続話題の開始表現が、主な分析対象とされてきた。前者は「先行話題が十分に話し尽くされ、それを転換する必要があること」(Covelli and Murray, 1980, p.385)を確認するためのものであり、相づちや話題をまとめる発話が該当する。後者は「結束性表示行動」とも呼ばれ(村上・熊取谷, 1995)、先行話題と後続話題がどのように結束しているのか、また結束していないのかについて、表示する表現である。それには「あのう」等の言いよどみ表現や、「話は変わるが」等のメタ言語表現などが該当する。終了表現により「先行話題が十分に話し尽くされた」ことを確認し、開始表現によりどのような新話題を導入するのか予告することで、唐突な印象につながる危険性を減らすことができると考えられる。先行研究では、それらの表現がないために「聞き手の戸惑いが発生し、会話が円滑に進まない結果となる」例も提示されており、終了表現及び開始表現の重要性が主張されている(エミ, 2013, p. 46)。

ここで本研究のデータから、終了表現及び開始表現を伴う話題転換と、それらを伴わない話題転換を、1例ずつ提示したい。例中の終了表現には下線を、開始表現には二重下線を付す。例1の望田は母語話者であり、ケツは中国語母語の学習者である<sup>1</sup>。

#### 例1<sup>2</sup> 終了表現と開始表現を伴う話題転換

ターン 番号	話者	発話内容	大話題 <sup>3</sup>
47	ケツ	冬に入ってから、結構寒い(ああ)ときもありません。(そっか)はい。(うん)ふん、だいたい東京と同じくらい感じかな。	ケツの出身地
48	望田	<u>ああ、こんな感じか。</u>	
49	ケツ	<u>うん。(うん) &lt;笑い&gt;</u>	
50	望田	// <u>なん、うんと、何だろう。</u> どこに住んでるんですか?	ケツの住居
51	ケツ	今ですか?学校の寮に。(ああ)3号館に住んでいます。	

例1では、ターン番号50の望田の新話題導入により、話題転換が生じている。話題転換前に注目すると、ターン番号48の「こんな感じか」は直前の発話の一部の繰り返しであり、それまで続いた話題のまとめとして捉えられる。それに続く49の両者の相づち及びケツの笑いも、当該話題が「十分に話し尽くされた」ことを確認する、終了表現と考えられる。50の新話題導入発話には、「なん、うんと、何だろう」という言い淀みが確認できる。これは「次の話題を考えている」ことの表示であり、先行話題と関係のない後続話題の導入を予告する、開始表現だと考えられる。そしてこれらの表現を用いることで、話題転換が唐突だと相手を感じる危険性が低くなっているといえよう。続いて例2として、終了表現も開始表現も伴わない話題転換を下に提示する。例2の浅井は母語話者であり、キュウは中国語を母語とする学習者である。

例2. 終了表現も開始表現も伴わない話題転換

ターン 番号	話者	発話内容	大話題
57	浅井	話してみませんかって言って (あ) 誘われて、 来たんですけど。今日2回目です、私も。	データ収集場面
58	キュウ	この？	
59	浅井	うん。前回もいたので。	
60	キュウ	//私、中国の上海から来ました。	キュウの出身地
61	浅井	あ、上海。えーと、あのなんか、サンディエゴ に行ってたんですけど、去年の9月、アメリカ。 (ああ) で、そこのルームメイトが上海の近く から来たって言ってました。	

例2では、「データ収集場面」について話した後のターン番号60で、「キュウの出身地」という新話題がキュウにより導入されている。58や59に終了表現とされる特徴は確認できず、60にも、言い淀みやメタ言語表現などの開始表現は確認できない。そして、終了表現も開始表現も伴わずに話題が転換された後に、浅井は61で「あ、上海。えーと、あのなんか」と発話している。その発話内容に加えて、浅井の声が一時的に小さく速くなっていたことから、エミ(2012)が可能性を指摘している通り、浅井に戸惑いが生じていたといえるだろう。この例2のような話題転換よりも、終了表現及び開始表現を伴う例1の話題転換の方が、唐突な印象を与える危険性は低いと考えられる。先行研究では、このような学習者による唐突な話題転換が指摘され、問題視されてきた。ただ次章で詳述するように、先行研究には終了表現と開始表現をともに分析対象としていないこと、話題転換の内容の結束性に注目していないこと、学習者の習得が明らかにできていないこと、という三つの課題がある。それら三つの課題をどのように解決していくのかについて、次章で述べることとする。

2. 先行研究と本研究の位置付け

本章では、話題転換に関する先行研究を概観しながら、残されている課題を提示し、本研究の位置づけを明確にする。まず村上・熊取谷(1995)など主要な先行研究で挙げられた話題の終了表現と開始表現を、楊(2005, p. 34)は以下のようにまとめている<sup>4</sup>。

先行話題の終了表現: 「はい」「うん」等の相づち、まとめや評価、笑い、繰り返し  
後続話題の開始表現: 「あのう」等の言いよどみ表現、「それで」等の接続詞、  
「えっ」等の感動詞、呼びかけ、「話は変わるが」等のメタ言語表現

母語話者は上記のような表現を用いながら、円滑な話題転換を行っていると考えられる。さらに楊(2007)は、West and Garcia(1988)を参考に、終了表現の有無とい

う形式面に注目し、話題転換を協同的転換、一方的転換、突発的転換に分類している。協同的転換は両者の終了表現がある場合、一方的転換はどちらかの終了表現のみがある場合、そして突発的転換はどちらの終了表現もない場合である。先の例1の話題転換は協同的転換であり、例2の話題転換は突発的転換となる。「相手の意向を確認し、判断を共有しながら会話を協同的に進めていく」(楊, 2007, p. 49) 協同的転換が、聞き手に唐突だと感じさせないという意味で、最も安全だといえる。そして反対に、どちらの終了表現もないまま話題が転換する突発的転換は、その名の通り、唐突な印象につながりやすいといえる。楊(2005)は中国語母語の学習者と母語話者の初対面会話を分析し、母語話者に協同的転換が多く、学習者に一方的転換と突発的転換が多いことを明らかにしている。李(2014)も同様に、接触場面の初対面会話における終了表現に注目し、その対人関係への影響に言及している。李(2014)は結果として、「一方的／突発的終了」であっても、相手が持つ会話進行の決定権に配慮するような話題選択を行えば、唐突な話題終了のマイナスを相殺」することができるとし、具体的には「相手だけが情報提供のできる」相手話題を後続話題とすることを、その方法として挙げている(p. 24-28)。話題転換がもたらす対人関係への影響を分析していること、そしてそこに終了表現の有無だけでなく、後続話題の内容も関係することを示唆している点で、李(2014)は意義深い。

楊(2005; 2007)と李(2014)が終了表現に注目しているのに対して、小暮(2002)は開始表現に注目している。小暮(2002)はACTFL-OPIの初級1名、中級5名、上級3名がそれぞれ参加する母語話者友人との接触場面における、学習者の話題転換を分析した。初級学習者及び中級学習者は、そもそも話題転換の頻度が少ないという結果だったが、少ない中でどのような表現を用いたのか明らかにしたことに、意義があるといえよう。また、上級学習者による開始表現の不適切な例として、「そういえば」の代わりに「そういうと」が用いられていたことなどを挙げ、上級でも「他の表現形式との違いにおける話題転換表現の機能を十分に理解しているとは言えないことを指摘している(小暮, 2002, p. 20)。異なる日本語習熟度の学習者を対象としたことに意義はあるが、対象とした学習者が非常に少ないことが、課題として指摘できよう。

また、上に挙げた楊(2005; 2007)と李(2014)は先行話題の終了表現のみを、小暮(2002)は後続話題の開始表現のみを分析対象としている。しかし終了表現がなくとも、「ちょっと話が変わりますが」等の開始表現で唐突さが緩和される可能性はあり、逆に開始表現がなくとも、終了表現の有無でその唐突さは大きく変わると考えられる。したがってその円滑さや唐突さを議論するためには、終了表現と開始表現の両者を分析対象とすることが、必要である。

さらに上記の研究は、話題転換における表現という形式面に注目しているが、先行話題と後続話題の内容の結束性には、ほとんど注意を払っていない。しかし後続話題が先行話題と全く関係ない話題なのか、先行話題から派生した話題なのかで、用いられる表現は異なるだろう。村上・熊取谷(1995)は話題転換を内容の結束性から、先行話題で言及されなかったことが後続話題となる新出型、先行話題で言及されたことから後続話題が選ばれる派生型、先行話題での言及はないがそれ以前に言及されたこ

とが後続話題となる再生型、という三つに分類している。先に挙げた例1及び例2は新出型の話題転換である。以下に一つ、派生型の話題転換例を示す。

### 例3. 派生型の話題転換<sup>5</sup>

ターン 番号	話者	発話内容	大話題
164	ミン	最近、そっか、あ、実家に帰ってますか？ 最近。	松本の出身地 への帰省
165	松本	えーとー。春休みに（うーんうんうんうん）行った つきりですかねー。	
166	ミン	// 「地名」の人は、みんなスキーとかできますか？	松本の出身地 のスキー事情
167	松本	あ、スキーはしますね。（あー）	

例3では165まで、母語話者である「松本の出身地への帰省」について話していたが、166のミンの質問により、話題が「松本の出身地のスキー事情」へと転換する。松本の出身地は雪の多さで有名であり、「松本の出身地のスキー事情」という話題は、先行話題で松本が出身地を開示したことから、派生したものと考えられる。そして例3の話題転換に際しては、何の終了表現も開始表現も観察されなかった。このような派生型の話題転換は、例1及び例2のような新出型の話題転換と比べて内容の結束性が高いため、終了表現と開始表現がなくとも、唐突な印象にはつながりにくいと考えられよう。同様の結果が、村上・熊取谷（1995）でも主張されている。このように内容の結束性によって表現が変わる可能性があるため、本研究では、内容の結束性という観点から話題転換を分類した後で、表現の分析に移りたい。なお紙幅の都合上、特に唐突な印象につながりやすい、新出型の話題転換に焦点を絞ることとする。

最後に先行研究の課題として挙げられるのは、学習者の習得を明らかにするものがなかったことである。習得を明らかにするには、日本語習熟度が異なる学習者を対象としたり、特定の学習者を縦断的に分析したりすることが望ましい。そのような研究は管見の限り小暮（2002）のみだが、小暮（2002）は先述の通り、開始表現のみを分析対象としており、学習者の数も非常に少ない。そこで本研究では、終了表現と開始表現を分析対象とし、母語話者との雑談経験の多い学習者8名と少ない学習者8名を比較することで、学習者の習得に迫ることとした。円滑な話題転換ができることは、適切なスピーチレベルの使用や発話ターンの受け渡しと同様、社会言語能力（ニューストプニー, 1995<sup>6</sup>）に含まれると考えられる。その習得要因として近藤（2009）は、明示的教育に加えて、インターアクションの重要性を主張している。適切な話題転換の方法については、シラバスに含まれていない場合も多く、日本語教育現場で明示的に扱われることは少ないと考えられる。そのため教室外での母語話者とのインターアクション経験、特に自由に話題が転換される雑談場面の経験が、習得要因として重要といえるだろう。そこで本研究では、母語話者との雑談経験の多い学習者と少ない学習者を比較し、そこにどのような習得があるのか考察することを、目的とした。また各学習者が話題転換に関して受けた明示的教育の有無などは、インタビューで確認する

こととする。

続いて次章では、研究方法について述べる。

### 3. 研究方法

本研究では研究方法の枠組みとして、宇佐美（1999）の言語社会心理学的アプローチを用いる。研究目的に応じた条件統制をしてデータ収集を行い、音声を文字化した。そして定めたルールに従い文字化資料をコーディングし、それを分析資料とした。以下、分析対象と分析方法について、詳細に見ていくこととする。

#### 3.1 分析対象

##### 3.1.1 協力者

学習者の習得を明らかにするという目的のために、異なる雑談経験を有する学習者が参加する、母語話者との接触場면을データとして収集した。話題転換については、その転換頻度や方法に、話者間の力関係と距離が影響すると考えられる。それらを可能な限り統制するために、母語話者と学習者を、都内 A 大学に通う初対面の 20 代女性の学生同士とした。さらに学習者の母語の影響をなくすために、中国語を母語とする者に統制した。また日本語レベルを統制するために、日本語能力試験の N1 に合格してから 1 年以上、教育機関で日本語学習を続けた者という条件を設けた<sup>7</sup>。そのため全ての学習者は、上級日本語学習者であるといえる。そして、円滑な話題転換に関する習得が母語話者との雑談経験を通して進むという仮説から、「母語話者と週に 2 回以上日本語で雑談していた期間が 2 年以上ある者」を雑談経験が多い学習者、「母語話者と週に 2 回以上日本語で雑談していた期間が 1 年未満である者」を雑談経験が少ない学習者とした<sup>8</sup>。雑談相手となった母語話者は統制しなかったが、来日後に出会ったアルバイト先の同僚と大学の友人がほとんどだった。いずれの学習者の雑談相手も、上下関係を意識することなく、気軽に話すことができる相手だったことを確認した。

以上の条件統制をした上で、本研究では母語話者 16 名、雑談経験の多い学習者 8 名、雑談経験の少ない学習者 8 名、全 32 名の協力を得た。

##### 3.1.2 データ収集

続いて、データ収集の流れについて説明する。本研究では、二者間の大学生による初対面会話を録音録画し、分析対象とした。データ収集は 2015 年 6 月 4 日と 18 日に行い、全協力者に 2 回ずつ、接触場面の二者間初対面会話に参加してもらった。つまり、母語話者は異なる学習者と 2 回、学習者も異なる母語話者と 2 回、話をしたことになる。その際協力者には、「大学の交流会で会ったことを想定して、20 分間自由に話してください」という指示を与えた。全 32 名に 2 回ずつ初対面会話に参加してもらうことにより、計 32 会話の二者間の接触場面データを得た。その音声データから文字化資料を作成し、その音声データ及び文字化資料を、本研究の分析対象とした。

また、会話後には全 16 名の学習者に対してインタビューを実施し、話題転換の方法について明示的な教育を受けたことがあるか、教師及び雑談相手の母語話者から、そ

の方法に関するフィードバックを受けたことがあるか、質問した<sup>9</sup>。

### 3.2 分析方法

本研究の目的に沿って、文字化資料をコーディングした。コーディング項目は、小話題及び大話題、内容面の結束性から見た話題転換分類、話題の終了表現及び開始表現である。以下順に、そのコーディングのルールを記すこととする。

#### 3.2.1 小話題及び大話題のコーディング

まず文字化資料の発話内容から、話題をコーディングした。本研究では三牧（1999, p. 50）を参考に、話題を「会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する事柄の集合体を認定し、その発話の集合体に共通した概念」と定義する。さらに、三牧（1999）が述べているように、話題は「さらに下位話題をもった内容的に階層的な構造を示すことも多い」（p. 50）。三牧（1999）はこれを、大話題と小話題と呼んでいる。本研究でも、まず小話題をコーディングし、小話題同士の結束性に着目して大話題をコーディングした。以下に本研究の会話データから、例を提示する。

#### 例4. 小話題及び大話題のコーディング

ターン 番号	話者	発話内容	小話題	大話題
65	トク	ふふふっ、(とてもー) 難しいです。	トクの研究	トクの
66	八代	とても (うん) おもしろそうな (うん) 研究になりそう。	のテーマ	研究
67	トク	<u>ふふっ、うん。</u> // <u>じゃ、</u> 今、4年生だから、就活です？	八代の就職 活動状況	八代の 就職活動
68	八代	就活中。		
69	トク	就活中。		
70	八代	はい。説明会に行ったりとか、(うん) あと、申し込み。あの、公務員試験受ける (うん) ので、その、願書を出したばかりっていう風に。		
71	トク	なんになりたいですか？	八代の	
72	八代	えっ？	職業希望	
73	トク	なんになりたいですか？		
74	八代	なんか、市役所 (あー、市役所) の職員 (うん) になりたい。(あー)		
75	トク	ロシア語と関係がある仕事が良いですか？	八代就職の	
76	八代	多分、あんまり関係のない仕事 (あー) です。なので、趣味でロシア語続けたい、続	言語の希望	

- |    |    |  |               |      |
|----|----|--|---------------|------|
|    |    | けられたら良いかなー (うん) って。//ロシ                  | トクのロシ         | トクと  |
|    |    | アって、行ったことありますか?                          | ア渡航歴          | ロシア  |
| 77 | トク | ないですけど、でも、うちのい、いとこの<br>お姉さん、行ったことある。     |               |      |
| 78 | 八代 | あ、(うん) そうなんだ。                            |               |      |
| 79 | トク | あっちで、7年間ぐらい (あー) 留学してま<br>した。 <u>うん。</u> | トク姉の<br>ロシア留学 |      |
| 80 | 八代 | <u>そうなんだ。(うん)</u> //近いですよ、中国<br>とロシア。    | 中露の地理         | 中露関係 |

上記の例では、ターン番号 67 のトクの「じゃ、今、4年生だから、就活です?」という質問をきっかけとし、「八代の就職活動状況」という小話題が始まっている。その後「八代の職業希望」と「八代就職の言語の希望」という、八代に関する小話題が続き、76の八代による「ロシアって、行ったことありますか?」で、「トクのロシア渡航歴」に話題が移る。「八代就職の言語の希望」と「トクのロシア渡航歴」にも内容のつながりは見られるが、前後の内容の結束性から、「八代の就職活動」で一つの大話題とすることが適当だと考えられた。同じように、小話題「トクのロシア渡航歴」と「トク姉のロシア留学」は、「トクとロシア」という大話題として捉えられた。

本研究では収集した全 32 会話の小話題と大話題を、上記のようにコーディングした。そして会話内の大話題から大話題への移り変わりを、話題転換と認定した。なお、文中で単に「話題」と記す場合は、大話題を指すこととする。また各会話は 20 分間であるが、時間で区切ってしまうと、話題が展開する途中で会話が切れてしまう。そこで本研究では、15 分以降で新たな大話題が導入されるまでの発話を、分析対象とした。

### 3.2.2 内容の結束性からの話題転換分類

上記の方法で話題転換を認定した後、内容の結束性に注目し、話題転換を「新出型／再生型／派生型」にコーディングした。例 4 の場合、「トクの研究」から「八代の就職活動」への話題転換は新出型、「八代の就職活動」から「トクとロシア」及び「トクとロシア」から「中露関係」への話題転換は派生型といえる。

### 3.2.3 話題の終了表現及び開始表現

続いて話題転換における、先行話題の終了表現と後続話題の開始表現をコーディングした。コーディング項目としては、楊 (2005) の先行研究のまとめを参考とする。それは先述の通り、「相づち／まとめや評価／笑い／繰り返し」と「言いよどみ表現／接続表現／感動詞／呼びかけ／メタ言語表現」である。このコーディング例についても、例 4 に下線及び二重下線を付したので、確認されたい。また終了表現に含まれる表現は、終了表現としてでなく、単に相手への反応として話題転換直前に観察されることもある。本研究ではそのような場合には終了表現としてコーディングせず、話題に一区切り付けるために用いられたと考えられる場合のみ、それを終了表現としてコ



コーディングした。

以上、小話題及び大話題、内容面の結束性からの話題転換分類、話題の終了表現及び開始表現のコーディングについて見てきた。これらコーディングは量的分析の基礎であり、その信頼性を確保することが非常に重要である。そこで評定協力者に上記のルールを提示し、二つの会話をコーディングしてもらった。そしてその結果が、著者のコーディング結果とどの程度一致しているのかについて、評定者間信頼性係数 (Bakeman & Gottman, 1986) を算出し、信頼性を確保した。なお話題名については、文言が厳密に同じでなくとも、概念が同じであると考えられれば一致とみなした。

#### 4. 結果と考察

会話後のインタビューの結果、「ところで」や「そういえば」という開始表現を教室で明示的に教わった学習者はいたが、話題転換に際してどのようにそれらを用いるのか、文脈とともに教わったことのある学習者はいなかった。また母語話者との雑談経験の中で、話題転換に関するフィードバックを受けた者もいなかった。したがって本研究で協力してもらった学習者にとって、母語話者との雑談経験が、円滑な話題転換の重要な習得要因であることが確認されたといえる。

各会話を、15分以降の新しい大話題導入の直前までで区切った結果、全32会話は計551分51秒となり、ターン数は7733となった。1会話の平均は17分15秒であり、平均ターン数は242である。コーディングは評定者間信頼性係数により、その信頼性を確認した<sup>10</sup>。全32会話で小話題は延べ1491、大話題は延べ512となった。話題転換数は480であり、1会話に平均で15回の話題転換が見られた<sup>11</sup>。その内228回は母語話者によるものであり、127回は雑談経験の多い学習者によるもの、125回は雑談経験の少ない学習者によるものである。2群に統制した学習者の話題転換数を合計すると252回であることから、母語話者と学習者に大きな差は見られないことが分かる。本研究ではこの、計480回の話題転換を分析対象とする。以下、4.1で内容の結束性から見た話題転換分類の結果を、4.2で特に注意が必要な新出型の話題転換に焦点を絞り、そこで用いられていた話題の終了表現と開始表現について見ていきたい。

##### 4.1 内容の結束性から見た話題転換分類

まず以下の表1が、内容の結束性に注目し分類した、32会話における480回の話題転換の、割合と頻度である。表中の話者「学習者多」は雑談経験の多い学習者を、「学習者少」は雑談経験の少ない学習者を表す。カイ二乗検定の結果1%水準で有意だったので ( $\chi^2(4) = 17.94, p < .01$ )、残差分析を行った。残差分析の結果有意だった項目の右側には、アスタリスクを付すこととする。アスタリスクが二つの場合は1%水準、一つの場合は5%水準で有意だったことを表す。

表 1. 話者ごとの内容の結束性から見た話題転換分類の割合及び頻度

話者	新出型	再生型	派生型	計
母語話者	25.4%(58)**	1.3%(3)**	73.2%(167)	100%(228)
学習者多	12.6%(16)*	6.3%(8)	81.1%(103)	100%(127)
学習者少	16.8%(21)	8.0%(10)*	75.2%(94)	100%(125)

上記のように、いずれの話者も派生型の転換が最も多く、次いで新出型が多かった。再生型はどの話者にも、非常に少なかったといえる。再生型の話題転換が少なかったことには、その会話時間も関係していたと考えられよう。本研究の会話時間は15分から20分だったが、会話がさらに続けばその分、前に言及されたことを話題とする再生型の話題転換も増えることが予想される。また、初対面会話でなく知り合い同士の会話であれば、以前の会話で言及されたことが話題となることもあるだろう。そのような際に用いられる表現については、派生型の話題転換とともに、稿を改め検討したい。

本研究で注目する新出型の話題転換については、表1の通り、母語話者に有意に多く、雑談経験の多い学習者に有意に少なかった。母語話者の新出型の話題転換を見ると、58回の話題転換の内の20回が、学習者に対する基本情報または経歴に関する質問だった。それは例えば、「いつ日本に来たんですか?」「中国のどこですか?」などである。加藤(2006)は、接触場面における母語話者の「非母語話者の日本語能力が低い場合は母語話者から話題を出せ」という規範意識を明らかにし、それを「言語的リソースを多く持っている母語話者が、会話をリードすることによって、非母語話者の負担を軽減しようというもの」と説明している(p. 12)。このような意識が、母語話者に新出型の話題転換が多くなった要因として考えられよう。それでは次節で、新出型の話題転換に焦点を絞り、そこで用いられていた表現を見ていくこととする。

#### 4.2 話題の終了表現及び開始表現

まず、各話者が新出型の話題転換において、どのような終了表現を用いていたのかを、表2に提示する。上段の「両者/転換者/会話相手」はそれぞれの終了表現の話者を表す。例えば頻度が5である母語話者の「会話相手」の「相づち」は、母語話者が話題を転換した際に、その会話相手が終了表現として、相づちを用いていた場合である。なお紙幅の都合上、楊(2005)の「まとめや評価」は「まとめ」と記した。両者による「混合」とは、転換者が相づちを用い会話相手が笑いをうけているなど、両者に異なる表現が見られる場合である。さらに、表中では観察された終了表現に基づき、協同的転換、一方的転換、突発的転換に話題転換を分類し、集計している。

表2. 話者ごとの終了表現と形式的な話題転換分類の割合及び頻度

話者	両者				転換者				一方的 転換	突発的 転換 (表現なし)	計				
	相づち ちめ	ま と い ちめ	笑 い 合	混 合	協働的 転換	相づち ちめ	ま と い ちめ	笑 い 返 し							
母語話者	5	4	6	20	60.3% (35)	4	4	0	5	0	4	0	29.3% (17)	10.3% (6)	100% (58)
学習者多	1	1	0	2	25.0% (4)	1	2	1	2	1	1	1	56.3% (9)	18.8% (3)	100% (16)
学習者少	1	1	0	5	33.3% (7)	2	1	0	1	1	1	0	28.6% (6)	38.1% (8)	100% (21)

母語話者の結果から見ると、母語話者には協働的転換が最も多く、突発的転換が最も少なかったことが分かる。これは楊（2005）の結果とも一致する。母語話者の協働的転換の内訳としては、特に両方で異なる表現を用いていた場合が多かった。そして、特に母語話者の「混合」には、両者からの一つずつの表現だけではなく、三種類以上の表現を含むものが多かった。例1の望田による話題転換も、そこに含まれる。複数の表現により「先行話題が十分に話し尽くされた」ことを確認することは、円滑な話題転換の手続きとして特に有効だと考えられる。一方で、どちらの終了表現も観察されなかった突発的転換は、母語話者の話題転換の内、わずか10%程度だった。どのような突発的転換が観察されたのかは、開始表現とともに後で見ていくこととする。

雑談経験の多い学習者は、その半数以上が一方的転換だった。一方的転換が唐突な印象につながる危険性は、突発的転換より高く、協働的転換より低いといえる。ただ、本研究で観察された一方的転換を質的に分析した結果、同じ一方的転換であっても、その「一方」がどちらなのかにより、その危険性が異なると考えられた。下に、一方的転換の例を二つ提示する。まず例5は、話題転換者の終了表現のみが観察される例である。

例5. 雑談経験の多い学習者による一方的転換（話題転換者の終了表現がある場合）

ターン 番号	話者	発話内容	大話題
63	佐藤	バスのほうが高いですね。	上海の
64	キュウ	うーん。で、中国は、あの上海は電車のほうが、絶対電車のほうが高い。	バス事情
65	佐藤	へえー、そうなんですか？	
66	キュウ	うん。うんうん。//今3年生？	佐藤の
67	佐藤	3年生です。	学年

上記例 5 では、「上海のバス事情」という話題の後に、66 でキュウにより「佐藤の学年」という話題が導入されている。終了表現として確認できるのは、66 のキュウによる相づちのみであるため、これを一方的転換に分類した。このような会話相手の反応を待たない話題転換では、「先行話題が十分に話し尽くされた」ことに相手が合意しているかどうかを確認されていないため、相手が唐突だと感じる危険性も高いと考えられる。続いて下に提示するのが、会話相手の終了表現のみが観察された場合である。例 6 の松本は母語話者であり、ミンは雑談経験の多い学習者である。

例 6. 雑談経験の多い学習者による一方的転換（会話相手の終了表現がある場合）

ターン 番号	話者	発話内容	大話題
85	松本	やっぱり、中国人が向こう、すごく多くて、(あー) うん、だから。	松本の留学中の体験
86	ミン	アジアだったら、(そうそうそうそう) 中国 (そうそうそう) って感じ。	
87	松本	そう。そうだね。中国人、みんな良い人たちだった。(ふうん) 仲良くなりますね。<笑い>	データ収集場面
88	ミン	// どうして、この、交流会みたいな、(あ、なんか) 来たんですか？	
89	松本	なんか、なんか、ポスターで貼ってあって。(あーあーあー) そう。	

例 6 では 88 でミンにより、「データ収集場面」という話題が導入されている。当該話題転換の直前には、松本による笑いが観察できる。この笑いは直前の発話内容と音声から、特に面白いことがあり発せられたものではなく、話題に区切りをつけるためのものだと考えられたため、終了表現としてコーディングした。したがってこれも、例 5 と同じく、一方的転換だといえる。ただ、例 5 と違って終了表現が会話相手によるものであるため、当該話題転換が会話相手に唐突な印象を与える危険性は、例 5 よりも低いと考えられよう。このように同じ一方的転換でも、どちらの終了表現が観察されたのかにより、唐突さの危険性は異なると考えられた。

続いて雑談経験の少ない学習者には、突発的転換の割合が目立って多かった。これが、どのような場面で生じたどのような突発的転換だったのかについては、他の話者と同じく、開始表現の結果とともに見ていくこととする。

それでは下の表 3 に、各話者の協同的転換、一方的転換、突発的転換をそれぞれ分母とした、開始表現の割合及び頻度を提示する。また、楊 (2005) が提示した「話は変わるが」等のメタ言語表現は本研究で観察されなかったため、表から割愛している。

表3. 話者ごとの形式的な話題転換分類と開始表現の割合及び頻度

話者	転換分類	いいよども	接続詞	感動詞	なし	計
母語話者	協同的転換	14.3%(5)	5.7%(2)	31.4%(11)	48.6%(17)	100%(35)
	一方的転換	11.8%(2)	5.9%(1)	47.1%(8)	35.3%(6)	100%(17)
	突発的転換	0.0%(0)	0.0%(0)	66.7%(4)	33.3%(2)	100%(6)
学習者多	協同的転換	25.0%(1)	0.0%(0)	0.0%(0)	75.0%(3)	100%(4)
	一方的転換	11.1%(1)	22.2%(2)	22.2%(2)	44.4%(4)	100%(9)
	突発的転換	0.0%(0)	0.0%(0)	66.7%(2)	33.3%(1)	100%(3)
学習者少	協同的転換	14.3%(1)	14.3%(1)	28.6%(2)	42.9%(3)	100%(7)
	一方的転換	16.7%(1)	0.0%(0)	50.0%(3)	33.3%(2)	100%(6)
	突発的転換	12.5%(1)	0.0%(0)	37.5%(3)	50.0%(4)	100%(8)

接続詞としては「じゃ」と「で」が多く、感動詞としては「えっ」がほとんどだった。それらの表現については、話者間で違いは見られなかった。また小暮(2002)は、「そういえば」の代わりに「そういうと」を用いるという、学習者の語彙レベルでの不適切な例を提示している。しかし本研究では、そのような例は見られなかった。

それでは表3の結果について、話者別に見ていきたい。まず母語話者は、協同的転換における半数近くで何の開始表現も用いていなかった。文字化資料を確認したところ、特に三種類以上の終了表現が観察される場合に、開始表現が用いられていないことが多かった。これは両者による複数の終了表現により「先行話題が十分に話し尽くされた」ことが確認できているために、開始表現を用いずとも、唐突な印象を与える危険性が低いためだと考えられる。一方的転換についても、母語話者は17回の内6回で開始表現を用いていない。確認したところ、その6回中5回は、例6のように会話相手の終了表現が観察された場面だった。下に一つ、その例を提示する。

#### 例7. 母語話者による一方的転換（話題転換者の終了表現がある場合）

ターン番号	話者	発話内容	大話題
33	望田	難しそう。	チュウの
34	チュウ	で、あの、「指導教官名」は、「指導教官の提唱理論」、その、その観点から研究するのは、結構難しい。頭痛い。<笑>	研究テーマ
35	望田	//中国のどこから来たんですか？	チュウの出身

例7では、34のチュウによる終了表現の後、35で望田により「チュウの出身」という話題が導入されている。このような一方的転換が、話題転換者の終了表現による一方的転換より危険性が低いことは、例5及び例6で見た通りである。さらに後続話題を見ると、「チュウの出身」という相手に関するものであることが分かる。2章で見た

通り、李 (2014) は、後続話題として相手に関する話題を選ぶことが、「唐突な話題終了のマイナスを相殺」すると主張している (p. 24)。母語話者による開始表現のない一方的転換を確認したところ、6 回全てで相手に関する後続話題が導入されていた。そのため一方的転換であるものの、それが唐突さにつながる危険性は、他の一方的転換より低いと考えられた。

続いて母語話者による突発的転換については、6 回中 4 回では開始表現が認められたが、残り 2 回には開始表現がなかった。したがってこの 2 回の話題転換には、終了表現も開始表現もなかったこととなる。以下にその内の一つを、提示したい。

#### 例 8. 母語話者による終了表現も開始表現もない話題転換

ターン 番号	話者	発話内容	大話題
12	原島	はい。よろしくお願ひします。	お互いの名前
13	カ	よろしくお願ひします。	と所属
14	原島	えーと。	
15	カ	今、始まっていますか？	
16	原島	はい。もう、始まっています。//中国？	カの出身地

例 8 では、会話冒頭の簡単な自己紹介と挨拶の後で、母語話者である原島が、学習者であるカの子籍について質問している。ここから「カの出身地」という話題が始まるが、学習者の出身地は接触場面の初対面雑談会話における、基本情報話題と考えられよう。三牧 (1999) は初対面雑談会話の「基本情報交換期／話題選択一展開期／終了期」という構成を示し、「基本情報交換期」で「自己紹介あるいは質問一応答形式による情報交換が活発に行われる」と述べている (p. 52)。そのような時間帯では、次々に新しい話題が導入されることが自然である。例 8 は会話の冒頭であり、この「基本情報交換期」に含まれると考えられる。そのため、表現としての唐突さは指摘できるものの、例 8 の場面で新出型の話題転換があること自体は、むしろ自然であるといえる。また例 7 と同様に、例 8 の後続話題も相手に関するものである。母語話者による終了表現も開始表現もない話題転換は 2 回とも、「基本情報交換期」における相手への質問により、なされていた。そのため唐突さにつながる危険性は、低いと考えられた。

続いて雑談経験の多い学習者の結果について、見ていくこととする。協同的転換において開始表現を用いないことが多いのは、母語話者と同様である。また注意が必要と考えられる終了表現も開始表現もない話題転換は、1 例しか見られなかった。それは母語話者と同じく、相手の基本情報に関する質問だった。雑談経験の多い学習者に有意に多かった一方的転換については、感動詞等の開始表現が確認できるものもあったが、9 回中 4 回では何の開始表現も用いられていなかった。例 5 として提示した話題転換が、その内の一つである。終了表現が話題転換者のものであり、かつ開始表現がないことから、唐突さの危険性は他の一方的転換より高いといえよう。唐突な印象を与えかねない一方的転換について、やはり注意が必要だと考えられる。

最後に、雑談経験の少ない学習者について、見ていきたい。当該話者は突発的転換の割合が他の話者より高かったが、その突発的転換において開始表現を用いない割合も、他の話者より高かった。文字化資料を確認すると、雑談経験の少ない学習者による終了表現も開始表現もないこれらの話題転換には、他の話者に見られない特徴が見られた。それは、4回中3回が「話題選択—展開期」におけるものであり、4回全ての後続話題が、自らのことに関するものだったということである。そのため他の話者による「基本情報交換期」の、相手話題を後続話題とするものよりも、唐突な印象につながる危険性は高いと考えられた。その内の一つは、例2として提示したキュウによる話題転換であり、それが実際に母語話者の戸惑いを引き起こしていることは、先に見た通りである。どのような場面で終了表現も開始表現もない話題転換が許容されるのか、雑談経験の少ない学習者は注意を向ける必要があるといえる。また当該話者による開始表現を伴わない一方的転換についても、2回とも例5及び例7のような、話題転換者の終了表現を伴うものであり、注意が必要だと考えられた。

## 5. さいごに

本研究では、上級学習者の円滑な話題転換の習得を明らかにすることを目的とし、接触場面の初対面雑談会話を分析した。唐突な印象につながりやすい新出型の話題転換に焦点を絞ったこと、先行話題の終了表現と後続話題の開始表現の両者を分析対象としたことに、意義があったと考えている。また、学習者を母語話者との雑談経験で統制したことで、いくつかの差を確認することができた。話題の終了表現に注目した表2からは、母語話者に協同的転換が多く、雑談経験の多い学習者に一方的転換が多く、雑談経験の少ない学習者に突発的転換が多いことが明らかとなった。ここから、学習者が母語話者との雑談経験により、突発的転換の危険性に気付き、それを避けるようになっているという可能性が示唆できる。そして表3の結果を基に、終了表現も開始表現もない話題転換がどのようなものか、話者間で比較することもできた。それによって、母語話者及び雑談経験の多い学習者が特定の文脈でしかそのような話題転換をしないのに対し、雑談経験の少ない学習者は、危険と思われるような文脈でもそれを生じさせていることが明らかになった。

また雑談経験の多い学習者には、新出型の話題転換の頻度が、他の話者より低かった。そこから、例えば新出型の話題転換が必要な場面で、当該話者が自ら話題転換せずに、会話相手の話題転換を待っていたという可能性も考えられる。本研究では話題転換の直前と直後のみに注目したが、会話分析 (Conversation Analysis) の研究では特に英語会話を対象に、先行話題の終了表現に向けたやり取りの詳細や、開始表現後に後続話題が確立されたり相手により却下されたりする様子も、分析されている (Bai and Hei, 2011 など)。それらを参考にしながら、より広い文脈の中で話題転換を捉えれば、話題転換の回避についても見えてくるだろう。今後の課題としたい。

## 注

1 本研究の話者名は、全て仮名である。

- 2 例中の小括弧の中は会話相手の相づち、山括弧は笑い、スラッシュ二つは話題の切れ目を表す。
- 3 3章で詳述するが、本研究では小話題のまとまりが大話題を構成すると考え、大話題から大話題への移り変わりを話題転換とする。例中には紙幅の都合により、大話題のみを記すこととする。
- 4 楊（2005）は「終了表現／開始表現」ではなく、「終了ストラテジー／開始ストラテジー」という用語を用いている。しかし本稿では、「ストラテジー」という用語が話者の意図を前提にしていると誤解されうると考え、より客観的な「表現」という用語を用いることとした。
- 5 例中で、会話参加者のプライバシーに関わるため伏せる必要がある情報には、鍵括弧を用いる。
- 6 ネウストプニー（1995）はインターアクション能力を、言語能力、社会言語能力、社会文化能力の三つから成り立つものとして定義している。
- 7 日本語能力試験には口頭能力を測る部門がないため、本来ならば学習者を条件統制するためには、ACTFL-OPIなどを用いるほうが妥当である。しかしACTFL-OPI受験歴のある学習者は、日本語能力試験受験歴のある学習者に比べ少数であり、受験歴のある学習者16名に協力してもらうことは、非常に困難だった。日本語レベルの統制については、今後の課題としたい。ただ、著者は日本語教師として5年以上の経験を有するが、会話後のインタビューで全員と話したところ、口頭能力が他に比べて著しく低い学習者はいかなかったことを、ここに参考として付記しておく。
- 8 雑談経験については、経験が全くない話者群を統制することができればよかったが、日本在住の上級日本語学習者で母語話者と雑談の機会を持ったことのない者は、見つからなかった。そこで1年未満と2年以上に統制したが、この期間が妥当かどうかは、今後検討していく必要がある。
- 9 これは、本来ならば参加者の条件統制の段階で行うべきことであるが、話題転換の方法を意識しながら会話に参加することを防ぐために、会話後に実施した。
- 10 評定者間信頼性係数を計算した結果、小話題は0.80、大話題は0.85、内容の結束性からの話題転換分類は0.94、開始表現は0.82、終了表現は0.81という値が得られた。
- 11 初対面会話の最初の話題については、先行話題がなく話題転換もない。そのため大話題の数よりも話題転換数が少ないことを、付記しておく。

#### 参考文献

- Bakeman, R. & Gottman, J.M. (1986). Assessing observer agreement. *Observing Interaction: An Introduction to Sequential Analysis* (pp.56-80). Cambridge: Cambridge University Press.
- Bai, P. S. & Hei, K. C. (2011). Topic shifts in conversations: Focus on Malaysian Chinese teenagers. *SARJANA* 26. 2, 101-118.



- Covelli, L. H. & Murray, S. O. (1980). Accomplishing Topic Change. *Anthropological Linguistics* 22, 382-390.
- West, C. & Garcia, A. (1988). Conversational shift work: A study of topical transitions between women and men. *Social Problems* 35, 551-573.
- 宇佐美まゆみ (1999). 「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ—」. 『日本語学』 18: 10, 40-56.
- エミ・インダー・プリヤンティ (2013). 「接触場面における「直接話題転換方略」に関する一考察—初対面場面の会話を維持するために—」. 『文化』 76: 3-4, 39-50.
- 加藤好崇 (2006). 「接触場面における文体・話題の社会言語規範」. 『東海大学紀要留学生教育センター』 26, 1-17.
- 小暮律子 (2002). 「日本語母語話者と日本語学習者の話題転換表現の使用について」. 『第二言語としての日本語の習得研究』 5, 5-23.
- 近藤佐智子 (2009). 「中間言語語用論と英語教育」『Sophia Junior College Faculty Journal』 29, 73-89.
- 田中奈緒美 (2015). 「話題転換時における談話標識の使用に関する日中比較」. 『島根大学外国語教育センタージャーナル』 10, 131-141.
- ネウストプニー, J. V. (1995). 『新しい日本語教育のために』. 東京: 大修館書店.
- 三牧陽子 (1999). 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分析—」. 『日本語教育』 103, 49-58.
- 村上恵・熊取谷哲夫 (1995). 「談話トピックの結束性と展開構造」. 『表現研究』 62, 101-111.
- 楊虹 (2005). 「中日接触場面の話題転換—中国語母語話者に注目して—」. 『言語文化と日本語教育』 30, 31-40.
- 楊虹 (2007). 「中日母語話者の話題転換の比較—話題終了のプロセスに着目して」. 『世界の日本語教育』 17, 37-52.
- 李珂南 (2014). 「日中大学生接触場面の初対面会話における話題転換—『ラポールマネジメント』の視点から—」. 『日本語教育』 157, 17-31.